

\*\*\*\*\*

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 65 2023. 3

\*\*\*\*\*

エルムの林とスペード形の総合博物館玄関 -----	新妻 徹	1
モンゴルと北大への想い -----	本平 航大	4
昆虫サロンで「昆虫と星の意外？な関係」を話してみた-----	福澄 孝博	5
牧野富太郎 利尻山に登る -----	吉中 弘介	6
「北広島 エスコンフィールド北海道」開幕 -----	加藤 和子	8

## 特別寄稿

### エルムの林とスペード形の総合博物館玄関

1954年北大農学部卒 新妻 徹

私は1931(昭和6)年に札幌郡円山村で生まれましたが、小児ぜん息で呼吸が苦しく、円山尋常高等小学校の校医の先生に森林の空気に触れるように指導されました。父は札幌の小学校の教員で道展の会員でもあり、山や森のスケッチをしていたので円山公園や植物園などに連れて行ってもらいました。特に夏の気温が私の呼吸に不適應で苦しく、円山小学校の3年生の夏休みに2歳上の兄と樺太(落合)の祖父母の家に父に連れて行ってもらいました。夏の樺太の空気が私の鼻に入り、ゼーゼーという気管が普通の呼吸になったのです。それから6年生の夏休みまで、1人で樺太に旅行しました。5年生の夏休みが終了しても、2学期は札幌に雪が降る12月まで、落合小学校に通学させてもらいました。父母が交代で桑園駅の窓口立ち、国鉄の切符を1枚入手してくれましたが、よく一人で旅行したと思います。札幌から稚内、そして8時間の稚泊連絡船「宗谷丸」、大泊から車で豊原を通過して落合へと、北へ向かうほど体調は良好でした。私の体力は回復し、サッカーや登山に集中した高校・大学時代を非常に懐かしく思い出しています。円山尋常高等小学校の6年生から、北4条西20丁目の北海道庁立札幌第二中学校に進学し、学制改革で道立札幌第二高等学校

2年生に編入となりました。1950(昭和25)年に北大に進学しましたが、戦争から復員した年配の学生も多く、体の不自由な学生が熱心にペンを走らせている姿に心を打たれ、北大の静かな落ち着いた空気を呼吸し、夏はサッカー、冬は登山というペースでした。母方の祖父母は、札幌の幌西小学校の近くの大きな家にすみ、祖母は助産婦であり山鼻・幌西地区で多くの出産を担当し、私は出産の湯を沸かす薪割りを手伝った思い出があります。

北大構内のエルムの大木に腰をおろし、スケッチをしていてランプのスペード形をした玄関が目に入りました。理学部です。AACH(Academic Alpine Club Hokkaido)のサインを入れた赤いルート旗を日高山脈に入山して木や岩に付着し、下山にルート旗を回収して鉱物をチェックする山行は岩石を知ることにもなり、地学の橋本誠二先生の日高山行にはメンバーとして参加させてもらいましたが、理学部の地質学鉱物学科の橋本先生の研究室へは行くチャンスがなく、一般教養科を終了して、学部移行調査の時には農学部畜産学科を希望しました。

私の母方の祖父は名古屋城の話をしてくれましたが、明治維新で八雲の徳川農場に入り、母は札幌の北海道庁立女子高等学校(現在の札幌北高)へ入学、

夏休みに八雲に帰省するのが嬉しかったようです。八雲の古い墓は名古屋の方を向いており、八雲高校の図書室には、現在でも徳川農場で象の足を切断して作成した物入れがあります。

冬の北大に降る雪の結晶は多様で、ゆっくり降りてくる結晶を黒い下敷きで受け取り、スケッチするのが楽しくて、理学部の横に大きなイグルーを作り、その中で結晶に息を吹きかけないようにしてスケッチするのは静かな楽しい時間でした。それにはまず、イグルーを設営しなければなりません。イタリアからの留学生フォスコ・マライーニにイグルーの設営を教わり、入り口を高く大きくして出入りの時に下敷きの上の雪の結晶を落とさないように注意しながら、イグルー内の雪のテーブルの上でスケッチするのは大変です。会話をすると雪の結晶は崩れるので、無言で早い動作で行動し、スケッチを終了したときの嬉しさは特別でした。北大山岳部の冬山合宿訓練は十勝岳の三段山で実施しましたが、ここに降る雪の結晶は大きく美しく、スキーの練習をしながら静かにゆっくり降りてくる大きな雪の結晶を、息を止めて見つめていたこともあります。国鉄「銭函駅」からスキーにシールを付けて、「奥手稲山の家」にツアーし、ユートピアと呼ばれた大斜面の雪質も非常に軽くて、森林の上に降る雪の結晶の美しさを見つめていた青春時代を思い出してしまいます。

北大理学部建物の総合博物館になって、一般に開放されたと聞き、北大祭の時に茶色のランプのスペード形をした玄関をくぐりました。私は学部移行で農学部畜産学科肉製品製造教室を希望しましたが、乳製品・皮革製造・牛学・馬学・小家畜などへの教室への希望者が多く、私は一人でした。畜産学科の定員 20 名に対して乳製品教室の希望者が多く、私は肉製品の栄養値を中心に研修する 4 人分の学生の机を 1 人で専有し、多くの参考書を机の上に並べて、橋本教授・安井助教授・深沢講師から家庭的なぬくもりのある指導助言をいただきました。私の兄は旧制の北大予科生で、私は新制大学の 2 期生であり、私の方が兄より先に大学の学生帽を着用しましたが、ドイツ語のゼミナールは一般教養科で 1.5 年間しか学習していないので、学部移行してからは、ゼミナ

ールのドイツ語で苦勞しました。北大に入学して、自然科学概論の講義「ゲゼール、ゲマインシャフト」は説明が分からず、その私の不十分なノートを欠席した友人が見せてほしいというので困りました。畜産学科の講義は、クラーク像の前にある古河講堂でしたが、軟石の出入り口の階段はすり減っており、ゆっくり歩かないと転倒しそうになりました。クラーク先生は札幌農学校に着任されて、学生たちに「Be Gentlemen」と言われたそうですが、学生たちは意味が分からなかったようです。半年ほど経過して、ワインを飲んで社会人として、大人としての自覚と広い心を持ちなさいという意味に気づいた学生が多かったと伝承されています。北大総合博物館はそのような歴史的背景が各部屋にありました。

札幌二中の 2 年生の時に、学級全員 50 名が長沼の援農作業に行くように言われ、軍隊のトラックに乗せられて、各農家に 2 名ずつ配置され、私は級友の和田君と菅沼さんという農家に分宿し、草刈りや田植えなどを経験しました。8 月 15 日の昼に長沼小学校の校庭に集合するように連絡があり、終戦を知りました。翌日はクラス全員で札幌の方へ歩きましたが、厚別で日没となり、厚別神社に宿泊させてもらいました。札幌はアメリカの空爆で焼土と化していると聞かされていたので、翌朝、緑に輝く藻岩山から三角山への山並みを見て皆で号泣しました。母校の教室には軍隊の鉄砲が並んでおり、油紙に包んでグラウンドに埋めました。授業は大日本帝国などという表現は墨で消して行く作業が多く、歴史の時間講師として来校された東大の歌川という大学院の先生が「世界中のスポーツといわれているア式蹴球をやりなさい」と言われ、アソシエーション フットボールのことを日本ではア式蹴球と呼び、ラグビーフットボールのことはラ式蹴球と呼称していると話され、放課後はグラウンドで素足でボールを蹴ってサイドキックやインステップキック、そしてヘディングをコーチしてくれました。アソシエーションは世界中で発音しづらいので、ソシエイトとなり、サッカー、そしてサッカーになったのではないだろうかと言う話は面白く、私は歌川先生の事を父や母に話して、ア式蹴球部に入部し、イモ畑だったグラウ

ンドを整地し、サイドキック・インステップキック・ヘディング・ストップなどを夢中で練習しました。北大に進学してサッカー部に入り、北18条の恵迪寮の前のグラウンドに行くと、牛が草をのんびり食べていました。牛の糞があちこちにあり、そこにバウンドしたボールを胸で受けたり、ヘディングでパスしたりするので北大サッカーグラウンドは、牧場でもあり、上級生たちは牛のべったりした排出物を体につけて走りまわっているのがユーモラスで、私もその中にとけこみました。牧夫さんの呼び声で牛が第2農場へ去っていったから本格的なフォーメーションの練習ができます。その頃は西の手稲山(1,023m)に太陽が沈みはじめて美しい構図です。ドイツの詩人カール・ヘルマン・ブッセは、「山のあなたの空遠く、幸すむと人の言う・・・」と言い、恵迪寮の1912(明治45)年寮歌 横山芳介君作歌「都ぞ弥生」では、「手稲のいただき、・・・たそがれこめぬ・・・」と歌われています。1930(昭和5)年の冬に木村三郎氏(北大農学部畜産学科)が手稲山に登山し、不帰の人となられましたが、北大サッカー部では冬のトレーニングとして手稲山の追悼スキーを実施してきました。木村氏は北海道蹴球協会を創設され、動物が人間の食料として活用される社会に対して、特に牛や豚の生命について考えられていたようです。木村氏の父が、「全てを愛する者に死は唯一の道です」という題名の遺稿集を出版され、私はその本で北大サッカー部の人間としての生活の姿勢を知り、何回も読みました。

私はAACHで、冬のヒマラヤ8000m峰ダウラギリI峰(8,167m)を計画したことがあります。ダライラマとパンチェンラマのネパール国内の政争のためか、「ノーパーミッション」のネパール政府からの電報で実現しませんでした。その後、1982年12月にAACHでダウラギリ登頂に成功し、冬の日高山脈への山行が結実したものと思ひ、AACHの仲間をととも頼もしく感じています。私は北大体育会の第6代委員長に選出されて、昭和28年度は多くの学友を知りました。

北大でワインを作ろうという記事を昨年の秋に北海道新聞で見ました。農学部の誰かが夢を語り、クラーク先生が愛したワインを「北大構内で!」という発想がユニークです。工学部の白い壁を背景に並

列する秋のイチョウの黄葉は美しく、ポプラ並木から望む手稲山の構図が好きですが、ポプラは根が浅くて強い風に弱いから「高山でしたたかに生きるダケカンバのように強くたくましく生きなさい」と言われたAACH坂本直行先輩の日高の原野での生きる姿勢と、日高山脈をクレヨンで輪郭を取り水彩絵の具をのせていく絵の迫力、そしてアイヌの人たちと交流する人間愛に多くの事を学びました。日高山脈のザラメ雪の層は雪崩の発生確率が高いから要注意という直行さんの言葉は、今も私の体の中で生き続けています。北大総合博物館の売店で、コップを購入しました。北大の各学部の名が縦書きに並んでいて、ポプラ並木を連想するデザインが気に入って愛用しています。

スイスの自然科学者ルイ・アガシーは「本からではなく、自然を学びなさい」(Study Nature, not Books)といわれました。GPS(全地球測位システム)で現在地がわかり、空中にドローンを操作し、SNSで即答を求め、スマホの普及している現代です。登山者の事故も多発しています。地図を見て目的の山の傾斜を知り、ピークまでの距離と所要時間を考える登山の基本を大切にすべきです。

私は9月9日に生まれ、この日は重陽の節句であり、99歳の白寿を目標に、北大総合博物館の階段を一步一步私の歩幅で登りたいと思っています。



夏の石狩岳(55歳の頃)

## 活動報告

## モンゴルと北大への想い

平成遠友夜学校教頭 北海道大学獣医学院 本平 航大

## 羊大国 モンゴル国

近隣の国、モンゴル国ってどんな国でしょう？大草原、ゲル、遊牧民、相撲。出てくるイメージはあっても、詳しく知らない人も多いのでは？

「баярлалаа」、モンゴル語で「ありがとう」を意味する言葉です。モンゴル語はキリル文字、つまりロシア語に近い文字が使われています。冬は厳しく、比較的過ごしやすい首都ウランバートルでさえ、氷点下30℃を下回ります。遊牧民の印象とは相反し、人口の過半数が住むウランバートルは大きなショッピングセンターが立ち並び、札幌育ちの私も不自由ありません。羊と聞くとニュージーランドの印象が強いかもかもしれませんが、モンゴルはなんと、人口300万人に対して、羊3000万頭を含む、7000万頭の家畜がいます。実は、そんなモンゴルと北大の獣医学院は色々なコラボレーションをしています。

## 残留動物用医薬品って何？

私とモンゴルの関係を紹介するには、残留動物用医薬品の話をしなければなりません。動物が病気になると、人と同じように、薬で治療を行うことがあります。投薬した薬は時間が経つと、生体内で代謝され、動物の体外に排せつされます。しかし、薬が排せつされずに畜産物中に残留してしまったものを残留動物用医薬品と呼びます。動物用医薬品が残留した畜産物は人や社会に悪影響を及ぼす可能性があり、薬が残留しないよう、各国で様々な規則が設けられています。大きく、①適切に薬を使用し、畜産物中に医薬品を残留させないこと（教育・普及啓発）②残留した薬を経済の場に出る前に検出すること

（調査・研究）の少なくとも2つの活動が必要です。モンゴルでも、畜産物に動物用医薬品が混入していないか、検査が行われています。しかし、人口をはるかに上回る家を持つモンゴル国、より一層、検査体制を拡充する必要があります。

## モンゴルとのプロジェクト

私はモンゴル生命科学大学獣医学部といっしょに残留動物用医薬品に関するプロジェクトを進めています。これまで、研究の面から支援を行ってきましたが、昨年、教育、普及啓発に関わる活動を始めました。写真は、残留動物用医薬品をテーマとしたボードゲームを作り、モンゴル生命科学大学の獣医学部の学生に講義してきた様子です。



授業の様子（中央が筆者）

ボードゲームは、残留動物用医薬品の問題から、食の安全をどう守っていくのか、を学生が考えられるよう作られています。国によって事情が異なり、この難題に単一の答えはありませんが、学生たちは、自分なりの考えを持ち、発表する力を持っていました。彼ら次世代の獣医師たちが未来のモンゴルの食の安全を守っていきます。休憩時間や講義後など、スマホの翻訳機能を片手に、懸命に私とコミュニケーションを取りに来てくれました。そうした姿を学生が見せてくれることが、講義をしていて、一番嬉しい瞬間です。本気で伝えたいことがある両者に、共通の言語は必要不可欠なものではありません。もう一つ嬉しいことは、彼らの中に、将来、日本での勉学を志す、また、少し日本語が話せる学生が複数いたことです。さて、今後、彼らと北大の学生の間でどんな想いが共有されていくのでしょうか。北大とモンゴルのさらなる化学反応を期待したいです。

Баярлалаа !

## 活動報告

## 昆虫サロンで「昆虫と星の意外？な関係」を話してみた

宇宙の4Dシアター 福澄孝博

北海道の短い夏も終わろうとする昨年のある日、一通のメールが舞い込んだ。「次回の昆虫サロン、ご担当いただけませんか」。しまった、油断した。この発端は昨年度の総合博物館研究報告会。昆虫サロンのご紹介の中で「話題提供者募集中」のアナウンスがあり、軽いノリで「星座になった昆虫たち、なんていかが？」とコメントを書き込んだ。「面白そうですね。コンタクト取ります」とのことだったが、一向に連絡はない。メールを見落としたかな？不安になり始めた頃、いつしか頭の中から抜けてしまっていた[願望があったのかも]。そこへ、いや、さらに時が過ぎて冒頭のメールである。なんと「星空をめぐるのにも良い季節を待ってくださった」とのこと。満を持しての登場と期待されていたのだった。

少し星座に詳しい方ならご存知と思うが、じつは昆虫の星座は「はえ座」一個だけだ。改めて確認してもやはりひとつ。もうちょっとくらい何とかなるかと思っていたが、なるわけがない。提案はしたものの愕然としていた：だから忘れようとしていたのかも。しかし、約束してしまったからには、ひとつの星座で30分以上話さねば…ここが腕の見せどころと思いつつ、天文仲間の知恵も借りて、お話を組み立てていった。自分でもすぐ浮かんでいたのは、はえ座の変遷（元はみつばち座だった、日本では最近まで”はい座”だったなど）や過去にあった星座たち。そこに、仲間が「星雲・星団になら今でも昆虫もある」「昔の星図にはこんな星座もある（私の知らなかった今はなき星座たちも教えてもらえた）」などアイデアや助言を寄せてくれた。よしよし、何とかかなりそうだぞ。現金なもんで、こうなると当日用のスライドを作るのが楽しくなってきた♪

ところで、なかにはこんな突拍子もない？アイデアも含まれていた。「オリオン座のベテルギウスは、英語名では“ビートルジュース”に聞こえる」、「いて座（下半身が馬、上半身が人のケンタウルス族：

因みに、ギリシア・ローマの人々が騎馬民族に攻め込まれたのが神話のモチーフになっているとかいないとか）は手足が6本なので昆虫？」。星座の定義や星座も変化すること、変遷の歴史など、昆虫にかこつけて「天文知識のあれこれ」をちりばめようとは考えていたが、これはどうも、「面白いトーク」にも出来そうである。ただし、いて座昆虫説云々は手足が胸から生えているわけではないと自分で思い至ってしまい、事前に却下した。でも、結局はネタにした（笑）。

そんなこんなで、当日（2022年9月27日）は、「星座は全部でいくつでしょう」「その中で昆虫の星座はいくつでしょう」「一つだけ！」に留まらずお話は楽しく弾み、これまた楽しかった講演後の質疑応答も含め、一時間をゆうに超えるものとなった。一つだけの星座で30分以上喋る男。新たな伝説の誕生である（大げさ：でも、その後の自己紹介に使わせてもらった）。唯一？心残りだったのは、Zoomでパワーポイントを共有すると全画面表示をリセットできなくなってしまい（自分があせったせいも）、大原先生をはじめとする参加者の皆さんの反応をお話のなかでうかがえなかったことである。まあ自分が一番楽しんだのでよしとし、当夜の酒は旨かった！

## 【ご紹介した天体は以下の通り】

**現在の星座：**はえ座（はい座・みつばち座[南のはえ座・インドのはえ座]）

**過去にあった現在は消えた星座たち：**北のはえ座（ずずめばち座）・スカラベ座・インドのみつばち座[誤植で一時的に存在]

**星雲・星団：**カブトムシの霧（バタフライ星雲）・アリ星雲・クワガタ星雲・とんぼ星団（E T星団）

**アイヌの星の名：**ダニ（オリオン大星雲）・ユキムシ（アンドロメダ銀河）

**星の和名：**ゲンゴロウぼし[カノープスのこと：奈良県宇陀郡で採取]

**オマケ：**住んでいたトカラ列島での昆虫の思い出。

活動報告

牧野富太郎 利尻山に登る

植物ボランティア 吉中弘介

皆さんは、日本の植物学の父と言われ、この4月からのNHK朝ドラ『らんまん』の主人公である牧野富太郎(1862~1957)が利尻山(1,721m)に登っていたことをご存じだろうか。

実は牧野は1903(明治36)年に利尻山に登り植物採集をしていたのです。この時に採集した標本が当館植物標本庫の収蔵庫より見つかりました。牧野本人から寄贈されたものではありませんが、その経緯は定かではありません。

牧野が利尻島の利尻山に登るに至った経緯と利尻山で難儀した採集の様子は、日本山岳会の機関紙『山岳』第1巻第2号(1906年)に寄稿した記事「利尻山と其植物」(近藤信行編『山の旅 明治・大正編』岩波文庫, 2003に再録)に書かれています。

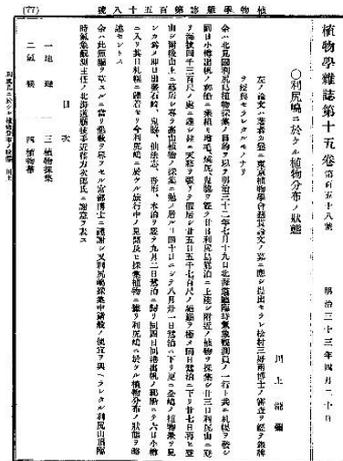
まず、牧野がなぜ利尻に行きたいと思ったか、そのきっかけは札幌農学校18期生でまだ卒業前であった川上瀧彌(1871~1915)が『植物学雑誌』第15巻158号(1900年)に投稿した論文「利尻嶋ニに於ケル植物分布ノ状態」を見たことで、牧野は一度はこの山に採集に出かけたいと思っていた。因みにこの論文は瀧彌が東京植物学会懸賞論文に応募して銀牌賞を贈られたものです。この論文は瀧彌が利尻山の気象観測調査に参加して1899年7月から8月にかけて40日間にわたり山上でテントに籠り植物採集に努めた後にまとめ上げた労作です。川上瀧彌は当時道内各地や択捉島で旺盛に植物採集を行っていたようで、阿寒湖のマリモの発見命名者としても知られています。



日本山岳会機関紙「山岳」表紙



牧野の「山岳」寄稿文冒頭



川上瀧彌の投稿論文冒頭

話を戻すと、日本山岳学会の会員で高山植物の採集と培養に熱心だった加藤泰秋子爵(伊予大洲藩の最後の藩主で明治維新の推進役、明治政府の北海道開拓推進政策に賛同し、洞爺湖畔の未開地であった月浦、仲洞爺、留寿都大原を買い上げ農場経営)が利尻山で高山植物を採集する意向があり高山植物の専門家の同行求めているとの話に乗り、牧野の利尻行きが叶ったのです。

利尻に向かう途中で滞在した札幌では、宮部金吾と幌向湿原で植物採集を行っています。

牧野の行程を略記すると、

- 1903年7月26日 東京発。
- 7月28日 青森発。
- 7月29日 室蘭着。
- 7月30日 虻田村幌萌(加藤子爵の農場)で加藤子爵と合流、付近で採集。
- 8月3日 札幌着、山形屋に逗留。
- 8月6日 宮部金吾・子爵・木下(山草家/法学士)・吉川(随員)と幌向湿原で採集。
- 8月7日 札幌から小樽に行き越中屋で休憩後、稚内行き日高丸に乗船。増毛経由。
- 8月8日 焼尻・天売・鬼脇経由で鴛泊着、宿舎熊谷に逗留。大泊海岸で採集。
- 8月9日 天候不順で待機、灯台付近で採集。
- 8月10日 登山開始 牧野・子爵・木下・吉川・人足8人で出発、藪漕ぎして沼(姫沼?)経由で登り薬師山(長官山?)付近まで採集するが日没となり、子爵一行は下山する。牧野と木下と人足4人が残り、小屋も食事もない山中で露営し、焚火で寒さをしのぐ。
- 8月11日 午前10時頃、麓から人足により食事と防寒衣が届く。この日頂上に達するが、木下は採集を終え人足と下山する。牧野は残って採集を続け、露営場所で採集した植物の整理で徹夜する。
- 8月12日 第2の峰(南峰?)まで行き、また頂上に戻る。ボタンキンバイを発見するなど一日採集を続け、夜を徹して下山する。途中で人足が難渋し、山中でビバークする。
- 8月13日 朝、濡れねずみ状態で宿に着く。一日宿で休息。
- 8月14日 子爵と付近の散歩程度。
- 8月15日 鴛泊から駿河丸に乗船し、帰途に就く。
- 8月16日 夜12時に小樽着、越中屋に投宿する。一行はここで解散する。

この牧野の利尻行きは加藤子爵の厚意によって実現したものでしたが、子爵からの条件が一つあり、それは牧野がこの採集旅行の紀行を書く約束でした。これについて、些事に拘泥しない牧野らしく寄稿文に次のように書いています。

“所が俗に云ふ、鹿を逐ふ獵師は山を見ずで、植物の採集に夢中になって居ると、山の形やら、途中の有様やら、どうも後から考へて見れば、筆を採って紀行文を作ると云ふことが、甚だ困難である、そこでいづれ其内にと思ひながら次第に年月は経過するし、益々記憶がぼんやりするし、今日となつては紀行を書くこととは、絶対に出来悪いこととなつて仕舞た、所が此事に当初から関係して居られる諸君は、頻りに此ことを余に責められるので、今更何とも致方がない、それで幸ひに山岳會の雑誌に大略のことを載せて貰ふて、自分の責を塞ぎ、且つは加藤子爵及び其他の諸君にも此顛末を告げて謝したいと思ふ”

『山岳』の12ページにわたる投稿記事を読むと、当時41歳の牧野は体力・気力とも十分で植物採集にかける意気込みが伝わってきます。利尻山の上部は崩落が進み危険箇所も多いところですが、初めて登る危険な山で無事に帰還できたのは人足として牧野と同行した地元の者の案内があったおかげでしょう。牧野が北海道を訪れたのは、この1903年の利尻島と、1927年に札幌でのマキシモヴィッチ生誕百年記念式典に出席して講演した時くらいでしょう。意外と北海道とは縁の薄い植物学者でした。

## 活動報告

## 「北広島 エスコンフィールド北海道」開幕

菌類ボランティア 加藤和子

2023年3月17日朝日新聞朝刊(21面)によると、「2021年夏北海道中標津町の家畜の飼い猫が新型コロナウイルスデルタ株に感染し、治療後に快癒した事が獣医師会学会誌に報告され、飼い主の感染により15%の確率で家猫も感染(ヒト→ネコ)し、他にも患猫からコロナ菌の感染を受けた獣医(ネコ→ヒト)の例やまた世界各地の動物園からのトラやライオンなどネコ科への感染が各地から報告が寄せられておりヒトからのネコ属へのコロナ感染は否定出来ない」とのことである。

突然だが、今「あなたの自宅周辺に暮らす自然界の野生動物は何ですか?」と問われるとどのような生き物を思い浮かぶだろうか。シカやノウサギ・キタキツネ・リスなどはわりとスナリ出てくるであろうが「他には?」と聞かれると「エト 鳥なんかも…」となり、「昆虫は?」には「セミでしょ…トンボとかチョウチョかな」となる方が多数と感ぜられる。自宅近くの自然界ってドコ??

2023年3月、札幌市近郊の北広島市に、プロ野球チーム日本ハムファイターズの新球場(エスコンフィールド北海道)を中心とした北海道ボールパークFビレッジが完成し、それは「プロ野球の試合(ゲーム)の場」+「ディズニーランドの様な多彩な遊び場を加えた新しい形の施設建設」を目指した、子供から大人まですべての人々へ向けた多彩な催しが、年間通して企画されていることは皆さまご存知であろうが、しかしその野球場が、きわめて稀な国指定の「特別天然記念物野幌原始林」の森から500m位に

ある事実をご存知だろうか。天然記念物法という国の法律に守られた森は、台風被害の回復作業であろうとその他いかなる原因であろうと、一切人間の立ち入りは禁止されている。「本来の植生を守り抜く」からこそこの「特別天然記念物」指定である。

2018年・19年頃の日ハムファイターズ球団を招聘した時期(企画期)の北広島市による住民説明会において用いられたプレゼンテーションには、たいてい「世界がまだ見ぬボールパーク」を創るとのフレーズと、「この自然を守り…」の画面があった。だが、エスコンフィールド北海道がファイターズの代理業者として前面に出た以後の説明画面からは「自然の」文字は誰も気づかない間に消失した。

生き物の歴史から見て人間の自然への支配とはそれほど優先権を持つモノであろうか。たかだか30万年ほど前に地球という星にやっと定着したらしい新参の種ホモサピエンスに過ぎないのに。自然への関与は自然の働きを学習し承知してから施行するのが本筋であろう。

2023年の3月29日(開幕戦前日)と30日(開幕戦当日)に開幕戦を祝って上空を航空自衛隊ブルーインパルス(ブルーインパルス)の飛行予定がある。このジェット機の音量が、巣作りを開始した野生生物に与える影響はどのようなものであろうか。特別天然記念物野幌原始林に隣接してエスコンフィールド北海道を設置した方々や日本ハム関係者にはまわりの自然に対して謙虚な気持ちで対応していただきたい。

## 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No.65

- ◆編集人:北海道大学総合博物館 ボランティアの会(編集委員:星野フサ、今井久益、久末進一、山岸博子)
- ◆発行人:在田一則
- ◆発行日:2023年3月1日
- ◆連絡先:〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。  
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>